中央大学論集　第44号　2023年２月

日本軍慰安所と将校・兵士・軍属

吉見義明

はじめに

本稿は、満洲事変以降に設置された日本軍慰安所に対する日本軍将校・兵士・軍属の意識・態度を検討するものである。この問題について、筆者は、以前に日本の戦争責任資料センターが行った国立国会図書館所蔵の戦争体験記・部隊史の中にある日本軍「慰安婦」に関する記述調査に参加し、資料紹介の形でその成果を公表しているが、(1)これに新たに参照した戦争体験記の記述を追加して、みてみたい。なお、この問題については、平井和子も戦争責任資料センターが調査した同じ資料を用い、彼女が調査した資料・聞き取りを追加して検討している。(2)

さて、この問題に関して、一九四一年二月に現役兵として野砲兵第一連隊に入隊した森利が、自らの体験と観察に基いて、徴兵検査を受けただちに入営した現役兵の買春や軍慰安所に対する態度についてのべていることが注目される。彼はいう。

当時、現役兵の大体三分の一は経験者で、何等かの形で女を知っていた。三分の二は欲情はあっても性病が怖いのと、そのような行為に対して軽蔑感が強いのか、理性で性欲を制御するとか、いくつかの理由で経験者とは対異性観を異にしていた。ところが、未経験者の半分は軍隊生活で女を知ることになる。残った半分は、服務六年間に及んでも断乎として女を拒否し、禁欲に徹したようだ。同じ現役兵でもこの三つのタイプが同居して、それなりの人生感（ママ）を持っていた。(3)

現役兵の三分の一は入営以前にすでにセックスの経験者で買春し、三分の一は未経験者だが軍隊の中で軍慰安所等を利用し、残りの三分の一は断乎として軍慰安所等の利用を拒否し、禁欲に徹していたというのである。拒否する理由としては性病感染が怖いこと、買春に対する軽蔑感、理性による性欲の制御など対異性観の相違を挙げている。これは大変興味深い指摘である。若い現役兵なので、軍慰安所に行かなかった兵士がかなり多かったということだろう。なお、森自身は、満洲の孫呉の軍慰安所に行き、長蛇の列に並んだが、列が進まないので、一円五〇銭の慰安券を破り捨てて、食べる方にまわったという。

これは現役兵に限った話なので、将校や、現役兵より年齢が高い予備役・後備役の召集兵については軍慰安所を積極的に利用する割合は高くなるが、軍慰安所の利用を拒否した者もかなりいた。以下、具体的にみてみよう。(4)

Ⅰ．買春と軍慰安所利用を肯定する軍人・軍属

1．強姦防止という言い訳

多くの将校・兵士・軍属は軍慰安所を肯定・歓迎し、それを利用した。以下、強姦を防ぐために必要だったという言い訳をしているいくつかの事例をみてみよう。一九三八年以降山東省の農村地帯で討伐戦に従事していた第五師団藤島部隊第九中隊の利重静は、一九三九年二月二五日の日記に、中隊は「野戦ピー屋」（野戦軍慰安所）行くことを許可されたとして、つぎのように記している。

外出理由を問われ、自分は「酒保」と答えて叱られた。何となれば、ピー屋に行くことが普通と見られていたからだ。それほど兵隊とピー屋は切っても切れない縁がある。隊長と共に野戦のピー屋を見に行った。支那人の家に陣取り、入口に「慰安館」と書いてあった。朝鮮娘が一〇人ばかり居た。(5)

彼は、兵士と軍慰安所は切っても切れない深い関係にあると認識していた。四月九日にはこう記している。

朝食後兵器の手入れ、洗濯。将棋をする者もいた。中にはピー屋に遊ぶ者もいる。野戦に慰安所は必要であろう。しかし一回二円五〇銭の朝鮮ピーは高い。それは将校用とかの話だが、将校用と別に区切る必要はないと思う。兵隊は八円八〇銭しか俸給はない。宣撫工作に強姦は絶対に禁物であれば、ピーの代価を安くして、しかも多量にこれを動員すべきであろう。これを軍の方で支弁すべきだと思う。(6)

中国住民に対して宣撫工作をするためには強姦は禁物だが、そのためには多数の軍「慰安婦」が必要だと思っているのである。

同様に軍「慰安婦」は必要だったとする元海軍パイロット、佐藤宗次はつぎのようにいう。

戦後半世紀もたって慰安婦問題が批判されているが、私見としては、殺伐とした戦場心理状態にある軍人たちには何よりもの慰安であり激励であり、そして勇気づけとなった。功績は大であったと思う。この点、内地にいて戦場の経験もない人がきれいごとを言っているのとは同日の論でない。もし慰安所施設がなかったなら、中国や南方の無辜の婦女子に対する暴行、惨殺、掠奪などの犯罪はもっと悲惨なものになっていたであろう。(7)

軍慰安所は強姦予防と軍人への慰安・激励・勇気づけに必須だったというのだ。

このような発想は少なくない。一九四〇年に野砲兵第四連隊に入隊し、華中に派遣されたある兵士（軍隊では経理官、復員後は元大阪砲兵工廠の会計課倉庫係）はつぎのようにのべている。著者の河村直哉

による聞き書きである。

兵隊が二ヵ月、半年して戦闘帰ってくるやろ、おなじ戦闘やってきた部隊でも、初年兵のようないわゆるその、童貞の独身者の部隊と、社会人の部隊と、われわれ経理官はどうするかというたら、ま、社会人の連中が帰ってくるときは、「ピー屋」を開設せなあかんねん。独身者は喰い気だけでええねん。そういうような経理官教育を受けたわね。〔中略〕その通りですわ。そうでないと、駐屯生活入ったら召集兵、みな強姦するがな。それを防ぐために極力「ピー屋」をな。[8]

この元兵士は、経理官として、家族持ちの召集兵に軍「慰安婦」は必要だという教育を受けた、なぜなら軍「慰安婦」がいないと召集兵はみな強姦するから、と語り、それが正しかったと今でも信じているのである。

ところで、軍慰安所があるにもかかわらず、戦地での民間の性買売施設の利用は止まず、兵士による強姦もしばしば起こっていた。

一九三九年に第一一四師団に配属され、山東省邱県にいた元憲兵は、つぎのようにのべている。

純真なもので、彼女〔朝鮮人「慰安婦」〕等は少し親しくなった兵隊の、洗濯から縫いものまでしてくれる。討伐作戦から部隊が帰ってくる時は、大日本国防婦人会の白い襷をかけて、／「コクロサンテシタ。コクロサンテシタ」／と迎えてくれる風景は随所に見られたのであった。〔中略〕／性病予防の立場から、週に一回、軍医の検診に立会って、不正を防止する任務も憲兵の役目であった。／その〔検診〕結果については、直ちに会報を以って「花子×」「秋子〇」「春子休」と兵隊一般に知らせるのであるが、兵隊も、こうした朝鮮部隊に厭きてくると、次第に猟奇を好み、支那姑娘等を漁り出してくるのだった。[9]

朝鮮人「慰安婦」に飽きると、兵士たちは次第に猟奇的になり、中国人女性をあさるようになるというのである。

上田政夫は、一九三五年、初年兵の時、独立歩兵第一二連隊に配属され、満洲へ派遣された。除隊後、一九三七年七月に召集され、主に山西省で討伐戦に従事した。一九四〇年一月に復員したが、一九四四年三月に再召集され、湖北省仙桃鎮に駐留した。ここで敗戦を迎え、国民党軍の捕虜になった。山西省にいた時、休日には聞喜や仙桃鎮の軍慰安所を利用しているのだが、討伐戦では住民の女性を強姦した体験を、悔悟の気持をこめて、回想している。

部隊は激戦を繰り返しながら山西省に入り、昭和十三年二月十一日の紀元節を期して一斉に行動した。／兵隊は苦戦した後や砲兵に誤射された時、その腹立ちを中国人に向けるのだ。八月に運城に入り、秋ごろ聞喜郊外の下邱村に入り駐留した。何日も根拠地を離れ、討伐に出かけなければならなかった。／その時も、根拠地を離れていた村に小隊は泊っていた。小隊長の命令で先輩と二人、夜間射撃の標識となる場所を探しに行った帰り道のこと。あたりはコーリャン畑で敵が隠れるのに都合のよい所だったので警戒しながら行くと、高台になっているコーリャン畑の横腹

に穴が掘ってあった。のぞくと女が一人いた。／先輩は中に入り、抵抗もされずに犯した。私にもと言ったので、断れば気まずいと思い、女に拒まれなかったので獣になってしまった。私を含めて人間の心の底が知れない。その時はあまり罪悪感がなかったが、一生の深い心の傷になった。／私は敵兵には容赦はしなかったが、中国の住民に危害を加えたことはなかった。しかし、これで完全に悪人になってしまった。私は中隊一の悪い兵隊だった。下士官になってからも先任下士官を殴り、慙愧に堪えないことをしてきた。／私はそれだけ気が荒かった。侵略戦争を聖戦と思い勇敢に戦ってきた自負もあるし、中隊幹部もそれを認めていた。私はいつも山で戦っていた時、麓の村では女を探し出しては凌辱してきた。[10]

軍慰安所の存在が強姦防止の役に立っていないことがよくわかる回想である。

戦場での強姦が楽しみだったと公言する元町議会議長もいた。

支那事変は余りにも中国人を傷つけた。／私の知っている某氏は町の議会議長をも務めた人であるが、或時、友人達に語って曰く、「俺は支那事変では中支に居たが、村々を占領すると、若い娘を探し出して強姦するのが、楽しみだった」と言っているのを聞いて、私は激怒して叱責した事があった。[11]

著者の原田政盛は、戦中、満洲国協和会などに勤め、戦後は福岡県穂波町助役などを務めた人で、彼が不謹慎な言動をする町会議長をたしなめた話である。このような現実があったのだ。

2. 享楽・愉楽としての軍慰安所

部下を統率する立場から軍慰安所開設を肯定し、最前線に潤いがでたという陸上自衛隊幹部学校元教官がいる。この元教官は第五六師団参謀・第三三軍参謀としてビルマに従軍し、敗戦時少佐だった。戦後、陸上自衛隊の第三管区総監部第三部長・幹部学校戦史教官などを務めている。

拉孟は、遠く人里を離れた憩いの場のない最前線で、将兵は連日、陣地構築のための穴掘りが日課で、荒涼たる生活の連続でストレスがたまる一方であった。しかし、部隊長の粋なはからいで、陣外の片隅に慰安所も開設されて、潤いのある生活も与えられるようになった。／こうして小規模ながらも、無人の山上の一角に、文化村（？）が出現し、将兵は束の間の平和をたのしんだが、それは嵐の前の静けさであった。[12]

兵士のストレスの解消と潤いの付与のために軍慰安所は必要だというのだ。このような人物が、軍「慰安婦」問題が浮上している時に、慰安所は将兵に慰安のためになったとして肯定しているのが日本の現実である。

つぎは海軍報道班員（軍属）としてジャワ島のバタヴィアとスラバヤにいた久生十蘭の日記である。彼は民間の性買売施設にも通っているが、軍慰安所関係の記述だけを引用するとつぎの通りである。

〔一九四三年三月一六日、バタヴィアで〕féminiを見に行こうと例の将校倶楽部へ行く。町外れのようなところ。大通りを風を切ってベチャ大いに快走す。爽快なり。フリでは愛想をせぬらしく仲々よりつかず。間もなく、下らぬ面をしたやつ三人来る。馬鹿馬鹿しくなり、禿頭に十円やって出る。こんなものよりIndonesiaのほうがよっぽどましだとそこへ行く。[13]

四月一日（木）晴。スラバヤ。〔中略〕サクラを出てIrianasträtの将校慰安所へ行く。きょうは外の慰安所がみな休業で遊客が全部ここへ殺到したよしで一人もいず、ベチャで出鱈目にチャリチャリ〔探し求めること〕に出かける。[14]

四月七日（水）晴。スラバヤ〔中略〕阪本氏、慰安所へ行かぬかと誘うゆえ、三人で出かける。〔中略〕船員らしい酔漢、女が相手せぬので大いにあばれている。女もジョンゴスも暗い庭を逃げ廻っている。結局、出鱈目に貧弱なインドネシアとprostituté す。あっけないほど気がなし。さっさとすまして出る。[15]

四月十七日（土）晴。スラバヤ。〔中略〕いつか行こうと思っていたBongaranの下士官慰安所の方へ〔ベチャを〕走らせる。[16]

享楽・愉楽としての軍慰安所利用である。彼は将校待遇なので将校用慰安所にも行くことができたようだが、軍慰安所の利用や民間の性買売施設での買春にとまどいはない。このような将校や高級軍属は少なくなかった。

3. 死を目前にしての軍慰安所利用

生の未練をたつため、軍慰安所に行ったという軍人の記録をみてみよう。今泉義夫元海軍大尉はつぎのように回想している。彼は海軍の伊号第一一潜水艦の乗員で、トラック諸島にいた時の回想である。

再度の出撃が二日後に迫ったあの日の私の行動は衝動的なものであったかも知れない。生への未練を捨てたい、何とか死を悠久の大義に繋げなくてはならないと焦る心情は平静を保ちえなくなって、夕暮れの迫る頃、闇雲に一キロを隔てた夏島の遊里へ短艇を馳せた。／小部屋に向かい合った妓女は、心の苛立ちを何かに縋って鎮めたいと願う私の気持ちを汲み取ってか、持て成しには真情が溢れ、思いがこもっていた。そして純真の象徴である童貞を優しく迎え入れた……。[17]

出撃を目前にして、生の未練を絶ち、平静を保つために軍「慰安婦」を利用したというのである。同様の回想は、一九四四年、大陸打通作戦への参加を前にした一兵士の回想にもある。

出動前には軍の心遣いか外出が許可される。今度の戦争は今迄の討伐とは違う。陸軍始まって以来の大作戦。支那派遣軍総出動で三ヶ月以上掛かるらしい。私も二十二歳の若い肉体を持て余している。今度は戦死するかも知れない予感がする。セックスも現役入隊前日生まれて初めて一度したきりだ。ピー屋（慰安所）へ直行した。ピー屋は超満員の行列。[18]

戦死の予感がして慰安所に行ったと、合理化しているのである。なお、鶴見俊輔は、ジャワで一回だけ軍慰安所に行った若者について、つぎのようにのべている。

十八歳ぐらいのものすごいまじめな少年が、戦地から日本に帰れないことがわかり、現地で四十歳の慰安婦を抱いて、わずか一時間でも慰めてもらう、そのことにすごく感謝している。そういうことは実際にあったんです。この一時間のもっている意味は大きい。／私はそれを愛だと思う。[19]

これも極限状態での軍慰安所利用を肯定する発想であり、それを鶴見俊輔が肯定していることは驚きである。

4. 戦地での純潔主義の崩壊と買春願望

陸軍中野学校出身の渡部冨美男の回想記は、純潔と恋愛を望んでいた若者が軍慰安所に入りびたりになる経緯を記していて興味深い。彼は、中国の康徳学院卒業後、上海の貿易商社、松林堂に勤務していたが、姫路第三九連隊に入隊した。その後、仙台陸軍教導学校・中野学校をへて、支那派遣軍総司令部に入った。林というのは、当時彼が使っていた偽名である。

林は軍隊に入るまでは女を知らなかった。幼なじみの恋人がいたが、そのころは男女の関係は厳しくて、学校でも男女共学ではなく、自由に交際することは難しく、正月とか祭りの時なんかに、みんなと一緒に遊ぶだけで、二人だけで話し合ったり遊んだりしたことはなかったし、お互いの気持ちは通じ合ってはいたが、手を握ったこともなく、清らかな恋人同士であった。兵隊たちだけではなく、そのころの風習として女郎買いのできないような男は一人前の男ではないと仲間外れにされる傾向があった。軍隊に入ってからの林は兵隊仲間とは、女について一人前の口をきいていたが、本当は何も知らなかった。恋人との清らかな処女と童貞とのままの結婚をするのが真実の愛だと、考えていたからである。／軍隊生活を経験することによって、林の考え方にもいろいろ変化があったし、いよいよ戦地に赴任することになり、神戸港から上海に船出する前の晩、林は覚悟を決めた。／「祖国に生還することはないだろう。さよなら日本、さよなら愛しき人達！」／神戸で一番有名な福原遊郭に向かった。初めて真っ裸の女に接した林に、女郎は「あんた本当に女を抱いたことがないのね」と言って、やさしく遊んでくれた。林、二十三歳になったばかりの夏だった。／上海に来て、宿舎の孤独に耐え切れなくなると、林の足はいつの間にか、ピー屋に向かうようになっていった。寧波に来てからも旅館の近くのピー屋に行って遊んだ。喫茶店や酒場で遊ぶよりも、ピー屋で遊ぶ方が本当の人情に触れるような気がした。[20]

当時の若者たちの中にも買春できないような男は一人前の男ではないという意識が一般的であったこと、それにもかかわらず、若者たちの間に一定程度浸透していた純潔主義が買春行動の歯止めになっていたこと、そして軍隊に入る時にそれが崩れて行ったことを示す事例とし

て興味深い。

召集されて海外の戦地に送られる軍人には、戦地では買春・強姦などしたいことがやり放題だという期待があったということもしばしば語られている。つぎにその事例をみてみよう。一九四二年に召集され、華中に派遣された井上俊夫は、それ以前に南京攻略戦や武漢攻略戦に参加して凱旋した兵士たちから戦地の話をこう聞いている。

そうした凱旋兵士たちは、俺たち若造に向かって、中国にいる朝鮮人や中国人の女は、日本の女にはない魅力をもっているなどと、いいかげんなことを吹聴してくれたものだ。そのため昭和十七年に俺も遅蒔きながら一兵士として中国大陸へ渡ることになった時、むこうへ行けば俺もクーニャンを抱くことができるのだといったことを考えていた。「麗しきクーニャン」といった勝手なイメージを自分ででっちあげ、それに憧れていたんだ。[21]

このような期待をもって兵士たちは戦場に出ていったが、そこでの体験をこうのべている。

恐ろしいことだが、兵士は一度残虐行為がもたらす愉楽を覚えてしまうと、もう病みつきになり何度でもやりたくなってくるのだ。殺人だけではない、略奪然り、放火然り、強姦然りである。／そして、こういうことをいくらやっても、大日本帝国という後ろ楯がある以上、兵士はちっとも怖くないのである。[22]

戦地では悲惨な体験だけでなく殺人・略奪・放火・強姦なども愉楽として体験し、それが病みつきになったというのだ。この中には軍慰安所利用も入るだろう。このようにして、かなり多くの兵士たちが軍慰安所利用だけではなく、強姦も平気でできるようになったということであろう。

Ⅱ．軍慰安所を利用しなかった軍人・軍属

しかしながら、すべての軍人がそうなったわけではない。森利がのべているように、とくに現役兵の中には軍慰安所に興味を示さない者も少なくなかった。以下、軍慰安所の利用をやめた軍人、全く利用しなかった軍人・軍属の事例をみてみよう。[23]

1．軍慰安所に無関心

東京第三二師団工兵第三二連隊の衛生兵だった武田貞太はつぎのようにのべている。

〔上海で南方行きの船を待つ間〕部隊によっては慰安所行きの外出をさせていたらしい。しかし我々現役兵は元気で、酒を飲んで騒いだりして気持を保っているのだった。私も酒飲みだったが、さすがに晩春の夜風は他人に言えぬ死の一字が思いの底にあった。／話題を変えて慰安所のことを書く。慰安所は部隊の駐屯地には有ったようだ。しかし働く女性達の事や組織等は兵隊は何も知らないし、また私の隊のように討伐が主任務で、戦場暮らしの者には、無関心の者が多かった。[24]

現役兵で討伐が主任務の者は軍慰安所に無関心だったというのだ。人

にもよるだろうが、前線にいる現役兵には軍慰安所は縁遠かったということだろう。

2. 軍慰安所の悲惨な状態を嫌悪して

深谷芳太郎は、浜松師範に勤務していた一九四一年に再召集され、遼陽へ派遣されたが、つぎのように記している。

> 休日に外出する時は「突撃一番」というサックを必ず持って出なければならない。日本軍の部隊のある所には、必ず慰安所がある。／慰安所には、日本P・鮮P・満Pがいる。〔中略〕慰安所に行っても、ズボンを下にさげて列をつくって並んでいるのを見ると、とてもセックスする気にはならない。[25]

軍慰安所に行ったが、そこでの兵士たちのみじめな姿をみて利用を中止しているのである。

一九四五年にバリクパパンの第二二特別根拠地隊にいた太田義一（敗戦時海軍一等兵曹）もこう回想している。

> N兵曹が外出時になるとサイドカーを必ず兵舎前に止めていて、出て来る若い兵隊に、「乗って行かないか」と同乗させてくれる。車を走らせながら、／「筆下ろしをさせてやるから追（ママ）いて来い」／である。慰安所まで一緒に行くが中へ入れば別々である。順番を待つ間、一人済む毎にドアの中から女が洗面器の中の水に、使用済みのゴム製品を浮かべ捨てに出て来る。／それを何度か見ていると意欲どころか、こうして待っている自分が惨めに思えてくる。別に現地の女を軽蔑して居るのでもないし、（今の儘で死のう）と思った事も無いが、こんな気持ちになるともうだめである。海仁会の甘い食い気の方へ向いてしまう。[26]

順番を待っている間に、買春しようとしている自分が惨めに思えてくる、というのである。このような回想はかなり多い。

3. 純潔主義の立場から

純潔主義の立場から軍慰安所に行かなかった軍人も少なくなかった。鯖江歩兵第三六連隊の山本武伍長は、一九三八年四月一六日に上海近くに青浦鎮にいた時、出動を前に外出が許可され、多くの兵士が軍慰安所に行ったとして、つぎのようにのべている（従軍日記に基く記述）。

> 慰安所については種々論議があり疑問もあるが、結局どの町にも設けられる。私はそれが是か非かはわからない。慰安所通いを生甲斐のように自慢話をする兵隊達を軽べつはしないが、偉いとは思わない。[27]

彼は、出征前に婚約をしており、「いかなる場合にも、一時の慾情に溺れて女の肌に触れることはせぬと、固く心に誓った」から、軍慰安所には行かなかったのである。[28] 彼は、一九三九年一月に岳州近くの臨湘で軍慰安所が開設された時にも、「軍隊がそんな不潔な女を連れ歩くこと自体がまちがいであり、例え生理的要求だといっても、故郷では最愛の妻が貞節を守り、子どもの養育に懸命であり、守られぬはず

はないと信ずる」と記している。[29] 彼の純潔主義の中には軍「慰安婦」を不潔な女とする考えがセットになって入っていたことがわかる。

つぎは第五飛行士団の若い経理官（将校）のビルマでの体験である。

慰安所がラシオには二軒もあった。俗にP屋と云った。一つは満月と云って、夜間は将校専用で、昼間は他の一軒と共に下士官兵達で賑っていた。／満月の方は崖の上の二階建なので、ずっと手前の方からもそのベランダに出ている中華服の広東女の姿が眺められたので、現地のシャン人はどんなに感じているだろうかと思って恥しい気がした。他の方は竜部隊が内地から連れて来た日本人部隊で、九州師団だけに戦いも強いが、あの方も相当なものらしく、二軒共なかなかよく繁昌していた。／明日をも知れぬ戦地で、若い元気な男に女が必要なことは肯けないことはないが、私は私流に明日の命が判らないからこそ、一層身を慎しむと云うことも云えるのだと思っていた。／見習士官の時は謹直だった男が、将校に任官した途端にこの慰安所であたら童貞を惜し気もなく捨て去った男を知っている。遠く内地に残した妻が一人で身を堅く持しているのに、戦地とは云え、夫がこのような処へ出入してよいものだろうか、と妙なところで道学者ぶった考えが出てきたりした。／部隊では苦力に支払う小銭が必要なので、私は度々両替に帳場へ出かけた。すると「主計さんは良いことをしている」と変な目で見られたが、だらしのない格好の女が落し紙を懐に入れて部屋に入っていく姿、部屋の外にはまるで便所の用達を待つ時のように、列を作って並んで順番を待っている兵達の動物的な姿を見ると、実に不潔な気がして、よいことどころか、こんな処へ来る奴の気が知れぬとさえ思った。[30]

明日をも知れぬ命だから一層身を慎むべきだという思いと、内地にいる妻のためにという思い、そして軍「慰安婦」や軍慰安所に並ぶ兵士を不潔だとして嫌悪する思いから、軍慰安所に行かなかったというのである。

つぎは、第一八師団・独立混成第一四旅団（一九三九年一月編成）の獣医少尉（一九三八年一二月一二日に中尉に進級）の日記である。

〔一九三八年五月二六日、蕪湖駐屯〕転戦に付少尉連中、慰安所に行くに付誘われたるも、之を拒否する。[31]

六月二十一日〔中略〕育児舗に至りて露営す。／本日偵察中、支那娘を見付け、戦友などしたれども、自分はその気になれず、砂糖のみを徴発して帰る。[32]

六月二十三日〔中略〕南京在住の支那娘、露営場所の近所にいて、兵共これを強姦す。戦を恐れたる様子を侵して決行するのだ。戦争だと云えばそれで終りだが余りにも悲惨だ。戦争の戦慄を覚えずにはおられない。僕などどうしてもその気になれない。[33]

六月二十四日〔中略〕行李を開いて妻子の写真を見て、初めてほっとした気分になる。／僕には可愛い妻子があるのだ、頑張るぞ。[34]

六月二十八日〔中略〕支那娘を強姦したものの内、病気にかかった者が出来た。一瞬の快楽で永久の楽しい家庭生活を破壊するに至るのだ。耐え難い辛抱ではあるが情欲の抑制に努めねばならぬと思う。(35)

十二月二日　晴天　武昌〔中略〕／本日より部隊の近くに慰安所出来る。／久しく女に接せないので皆は興味あるげに話しているが、僕はそんな気も起こらず帰還を待つ。(36)

十二月十一日　曇天　武昌〔中略〕／今日は日曜であるので兵は大部分外出す。／五時頃兵は戻って来て今日買った女の話などしている。身体も悪いし、そんな話には興味がない。(37)

十二月十三日　晴天　武昌〔中略〕／本日は部隊長以下将校全員及下士の大部分は武昌に遊びに行き〔残った〕幹部は僕一人だ。皆と行動を共にしないのは悪いと思ったが、女を買いたくないので致し方がない。妻は果たして此の態度を心から喜んでいてくれるだろうか。(38)

〔一九四〇年〕三月二九日　雨／雨の中を瑞昌警備隊保管馬の定期馬鼻疽検疫を実施する。／午後一時より慰安所の女の検黴を石井中尉が実施したので見学する。実物を見て、話を聞くと、遊びになどは到底行けるものではない。(39)

七月二十八日〔中略〕／原中尉が11軍自動車廠に変わるので別府亭で中少尉集まり送別会をする。会後皆遊びに行ったが独り帰る。妻よ感謝せよ。(40)

彼は、同僚から誘われても軍慰安所にいくことを拒否し、徴発や露営中の輪姦への参加も拒否し通している。その理由は、強姦は戦地であってもしてはならないという当たり前の判断からであり、軍慰安所利用の拒否は、可愛い妻子がいるのにという思いと、性病感染への恐れからであった。ただし、兵士たちが輪姦していても、それを止めようとはしていない。

将校ではなく、兵士の場合も同様の事例がある。野戦高射砲第三二大隊の兵士、笹山良樹は、自らは軍慰安所に通ったが、多くの兵士たちが妻を思って慰安所行きを拒否した、とのべている。

外出の許可があったシンガポール島やジャワ島でも我が隊の戦友の中に、故郷で苦労して一家を、子供達の成長をと懸命に守って居られる妻を思い「どうして慰安婦を抱けようか」と慰安所に足を向けない戦友が多く居られました。戦争の実態を知らない世代の人達には何を話しても理解して貰えないだろうかと思うが。(41)

多くの兵士が、故郷に残した妻が子どもの成長のために懸命に生活していることを思って軍慰安所行を拒否している、というのだ。

別の理由を挙げる元兵士もいた。佐々木賢二はソ満国境附近に駐屯する部隊の兵士であった。二年兵になって外出を許された一九四四年頃の体験である。

三尺間に仕切られた所に何人かの女が寝たままでおり、御希望の兵隊達は列をなしてズボンのバンドを外して順番を待っているのである。二十歳前の若い兵隊などは人様の様子を眺めて実技の前に暴発している者もいる。我が輩は三人の子供もいるお父さん兵隊である。とてもこんな事は出来ない。後学の為と思い見学はしたが、全く何とも表現出来ない状況であった。[42]

軍慰安所の見学はしたが、そのあさましい様相を見て、三人の子供がいる父としては、とてもこんなことはできないと思ったというのだ。

性病予防のために軍慰安所との関わりが職務上生ずる立場であったある衛生兵はつぎのようにのべている（一九三八年四月四日の著者の日記の記述で、場所は常熟である）。

四月四日　晴天／第四慰安所勤務。／随分暑くなって、蚊も蝿も出た。若葉若芽、山は青く気も朗らかに、うららかな春。／戦地唯一の慰安所。他に何一つ慰安となき征地にて無理もない。然し、僕は皆と考え様が違う、戦友達が／「おい天木！　たまには慰安所にでも行って、気晴らしにやって来い。長らく辛抱していると病気になるぞ」／等云うが、留守を寂しく陰膳を据えて、ひたすらに無事である事を祈っている妻子の事を思えば、そんな気にもなれない。[43]

故郷で自分の無事を願っている妻子のことを思えば軍慰安所に行く気になれなかったというのである。

同様の証言をする元陸軍兵士もいた。彼は朝日新聞記者だったが、一九四一年に召集され、華中・満洲・サイパン・グアムと転戦した。

〔新聞記者だった時に〕妻の貞淑を望むなら、自分もそれと同じことを実行しようという考えははっきり持っていた。それを自分が破るときは、妻と別れる決心をしたときであり、別れられても仕方のないときであると考えた。酔いつぶれて終電を乗りすごしても、夜の明ける前に家まで歩いて帰ったし、友達の家へすら泊まらないようにつとめていた。それが一年、二年と続くと、なんでもない自然なことになった。幸いほかの女が好きになるような機会にもめぐりあわさなかった。そして軍隊に入った。／中支にある原隊への輸送間、漢口で社の支局をおとずれたことがあった。そこの野口さんは漢口の街を一部案内したあとで、あるホテルの前で立ちどまり僕にこういった。／「ここはフランス租界でも上品な家です。十円でけっこういいサーヴィスをします。僕はちょっとまだ用事がありますから――」／僕が女房があることを知りながら、野口氏はこういうのである。兵隊というものは何はともあれ、それがいちばんだと、氏の従軍の経験が教えたのであろうと解釈した。／僕はそれほどデカダンにも、自棄にもなっていなかった。長い野戦生活ですさみきった古強者のいる部隊へ初年兵としてとびこんでゆくのだという緊張と、なんとかして切り抜けねばならぬという気構えとを持っていた。不案内な外国租界で、女と遊ぶなどということは不安であったし、いまここで遊べば、気構えが足元から崩れるように思われた。なおそのうえに、「生きて帰るんだ」という考えが心のいちばん底に横たわっていた。生きて帰るということは、妻とのつながりの続いていること

なのである。／野口氏には悪いと思ったが、「だいたい道筋は分かりましたから、少し一人でぶらついてみますから――」といって別れた。〔中略〕／満洲では外出と慰安所はつきものだった。連隊の酒保係から日用品の配給があると、サックは必ずついてきた。〔中略〕外出時の戦友組がやかましかったころは、彼らと組んで外出したときは、慰安所まで僕も同行せざるをえなかった。〔中略〕／「僕はいいんだよ。そのかわり、ここでちょっと待たせてもらう」／きざに見えはしないかと気にかかったが、女は別に不快な顔もせずに出ていった。(44)

彼は、各地で民間の性買売施設や軍慰安所を見に行ったことがあるが、そこで買春はしなかったという。その理由のひとつは内地にいる妻とのつながりの意識であり、妻の貞淑を望むのなら軍慰安所などを利用してはいけないと思ったというのである。

つぎは、同様に軍慰安所利用を拒否した元陸軍通信兵（内地では演劇の演出家・脚本家・翻訳家）だが、漢口の積慶里軍慰安所についてこう回想している。

その一軒に佐藤上等兵の馴染みの女がいるらしく、彼は上がり口に腰をかけ、脚絆の紐を解きながら、／「お前は上がらないのか、突撃〔コンドームのこと〕なら持ってるぞ」／と勧められたが、もともとそんな気でついてきたのではないので、／「いや、ここでお待ちしています」／と断って、入口の控え室のような所のベンチに腰を下ろした。〔中略〕とにかく私にとって女性はまだ犯しがたいヴィーナス、マドンナであるべきだったのである。〔中略〕／三〇分ほどして佐藤上等兵が奥からぶすっとした表情で姿を現した。／「何だ、やっぱり入らなかったのか。お堅い男だな、お前は……」／と不機嫌そうに言った。／「お前はこんなおれを軽蔑するだろう」／人は人、自分は自分というのが今も変らぬ私の人生態度なのだが、その時、私が彼と同調しなかったことで自分が咎められたように思ったらしいのである。それと気づいたのは内務班に戻ってからのことだが、以後どうも二人の間が気まずくなり、／「お前は女みたいな奴だな。ち○○があるのか」／と、とげとげしくいわれたりする時もあった。ち○○はあるが、朴念仁の私には愛のないセックスは良心が許さなかった。(45)

彼は、愛のないセックスは良心が許さないとして軍慰安所を利用しなかったのである。

4. 情操上の理由から

すさんだ生活はしたくないので女絶ちを決心していたという小松真一は台湾製糖会社酒精工場長だったが、一九四四年一月、第一四軍司令部付（五月から南方総軍司令部付）の陸軍専任嘱託（軍属）となった。以下は、四月にマニラのベイビューホテルに移転してからの生活の回想である。

石村氏は精力絶倫なので女の話となると途中から淫売買いに出かけ、あとでシャワーをジャージャー浴びていることがよくあった。初めはしきりに誘われたが、冷やかしには行くが買物はせんのでしまいには誘わなくなった。「小松さん、出る時奥さんと何

か約束したか？」等よく冷やかされた。淫売は冷やかすばかりなので、彼女らも顔を覚えてか、ベビューの近くのイサックペラーの辻君達はあまりひっぱらなくなった。／ベビューホテルは高等官だけのホテルだが、その住人はほとんど「打つ、買う、飲む」が専門だった。謡曲をやったり、尺八を吹いたり、本を読んだりする人は変人の部類だ。日本の知識階級の集まっているこのホテルの品性はあまり上等とは言えぬ。日本人の生活に趣味というか、情操というものが少なすぎるので、一歩家を出るとこの様な荒んだ生活になる。こんな生活で本当の仕事ができるわけがない。「一億一心」と内地では酒もなく、先祖伝来の老舗を棒に振って工場に徴用されている時、マニラだけがこんなデタラメな生活をしていてよいのか？　それより日本人の品性が情なくなった。日本人は教育はあるが、教養がないと或る米人が批評したというが本当だ。〔中略〕／マニラの生活は遊ぶことと決めている連中の中で、女絶ちはなかなか抵抗が多かった。別に女房に義理を立てたわけではないが、いつとはなしに国に帰るまでは精進すると決心した。淫売は冷やかすものと決めていた。[46]

日本人の生活には情操が少ないので、荒んだ生活になると思って「女断ち」をした、というのである。

つぎは軍慰安所利用は不要だと考える陸軍将校父子の記録である。少し長いが関連部分を引用する。

〔一九三九年五月一日〕過日〔息子の〕祐順から次ぎのような手紙が来た。／前略／どこでも同じですね。慰安所が有るのですね。／これだけは仕方がないらしく、僕自身は固く守って居るものの、これを他に強ふるのもどうかと思って居ますが、戦に来た故を以て女を知り、其の上金鵄勲章まで貰はしては済まぬと思ひ、内地じゃ思いもよらぬ精神訓話をやらねばなりません。幸い？今居る所には有りませんが、敢えて強姦をやる奴も居ず、其の内〔軍慰安所が〕被服巡回修理班然として、トラックで一ヵ所十日位で廻って来るとか、アーアー戦争ならでは（全く巡回性欲吸収班と名付けますがね[ママ]）、お互いこんな事内地に知らし度くありませんがね。先日大隊本部で隊長集合後宴会有り。アンタ、サケノマンテスカ。ハズカシイノ、ココロ、イランテスヨ、ビールハトウテスだなんて野郎来やがったけど、僕ともう一人物凄い愛妻家と二人して「エーイ朝鮮ピーの酒が飲めるかい」って、一角を占領し、二人して大気焔をあげ、とうとう箸で皿を叩き割って仕舞ひ、其の後大多数は、折角当番が寝台を準備して呉れて居るのに、思い思いに引っ張って闇にかくれてしまったので、僕の当番もてっきり、そう思い込んで居たらしいのに、僕がそのもう一人の奴等と共に麻雀して居るのに安心して「隊長も行かれたと思いました」って「馬鹿言うな、貴様が折角床とって居るのに行けるかい」って言ってやりました。全く此の道は自制一つでどうにもなると思います。自制の力とそして一人の女性への男の純情と、そして又戦争にも負けず自らを制する道徳心だらうと思います。そして気の荒む事により道徳心も鈍るものであって、常に気を柔げて落着いて居る要ありと思います。そして又気を柔らかに持つ、之は矢張り自制心と男の純情より発すと思うのです。なんだか理屈っぽく、ややこしくなりましたが、斯う信じ、只管身を

守って居ます。お父さんも真っ黒な顔と、いい年だから、そして僕の親父だから安心して居ます。(後略)／それに答えた返書に「女に対するお前の考え方は全く同感で、我が子ながら敬服する」と言ってやった。／軍に於ても予防法は喧しく言っておるがチョイチョイ悪い病気に罹る者が有って、あたら一生を棒に振る者が有る許りでなく、罹病者は癒るまで凱旋の時でも上海辺りに残す事になって居る。／之に就いては色々書き度い事は山程有るが紙面を汚す虞れあるのと一般女性に対する尊敬心と出征軍人の名誉とにかけて、これ以上どうも書く事が出来ぬのを遺憾とする。(47)

〔一九三九年六月三〇日〕箬谷と言う所は修水川の畔で、張公渡の上流約十里にある一邑であって、今私の方の出張所があって、其の方面に対する兵站業務を担任しておる。〔中略〕私の縄張内「十五、六里」の広範囲は昨年の十月頃から修水川を距てて睨み合っておった所なので、我が方には支那農民は一人も居なかったから未だに際限もない広い沃野が耕作もされずに放つたらかしである。避難先で彼等は何を喰っておるか。草や根を喰っておるに違いない。最近四、五十人山から降りて来たから自治会を組織さして保護してやっておるが可哀想なものだ。其の内に母娘二人の組があって、可愛い我が娘を進上するから母に食を与えて呉れと申し込んだものが有る。出来る丈母娘を保護してやる積りだ(勿論姑娘の進上は断った)。(48)

これは父子の中国転戦日誌と往復書簡をまとめたものだが、子息は、軍慰安所利用を拒否していた。その理由は、自制の力と、愛する女性への純情と、戦争に負けない道徳心があればそんなものは不要だというものである。また、父は食料を提供してくれれば女性を提供するという住民の申し出を断っている。なかなか立派な態度である。軍「慰安婦」制度にも批判的である。ただし、朝鮮人「慰安婦」に対する子息の露骨な差別意識と、制度自体をなくするために行動しようとする意識が父子ともにないのは気になるところである。

5. 人道上の理由から

独立歩兵第四八大隊の兵士だった佐々木博は、一九四〇年、満二二歳になった時、嘉興の軍慰安所で初めて性の体験をしたが、軍「慰安婦」は温かく対応してくれたという。その一週間後同じ軍慰安所にいったが、この女性はよそに移動しており、別の女性に今度は事務的に対応されて憤慨する。しかし、その後思い直した、としてつぎのように記している。

この日も平日で他に兵は居なかったのだ。もっと親切にしてくれてもよさそうなものだと一度は思ったが、〝此の人たちはどんな事情で慰安婦になったのか知らぬが、金で見も知らぬ兵隊に身体を売って生きて行かねばならぬ。それをまた、金で性欲を満足させるためだけに相手の身体を凌辱する。罪な話だ〟。彼女の無愛想さを見てそういう想いが蘇ったので、後を続ける気がしなくなったのだ。それきり、僕はこんな罪な事は二度とすまいと心に決めた。(49)

自分はお金で女性を凌辱しているということに思い至り、以後、女性

を買うことをやめたというのである。お金で女性を買うこと自体が性暴力であるという認識である。

同様の思いは高戸顕隆海軍主計大尉（敗戦時）ものべている。彼は、トラック諸島の第四艦隊第九〇二航空隊司令部に行った時、同期の大和田渉主計中尉（航空隊副官）に将校慰安所に誘われたが、断ったという。

> 彼〔大和田副官〕はいち早く私の顔色を見ると、気分でも変えるように、／「どうだ、眼の保養をやらんか。案内するぞ。もっとも、いま行けば百鬼昼行（夜行にあらず）だがね……」と言ってカラカラと笑った。将校慰安所のことを意味していた。／「冗談じゃないよ」私は即座に打ち消していた。／眼の保養どころではあるまい。日本から、無理にか、志願してか、金のためか、相当たくさんの女が連れてこられていたのである。／明日をも知れぬ命を思い、捨て鉢に人生を燃焼させようとする兵士の心はわからないでもなかったが、自分にはそれが別の世界のように思われてならなかった。／「そうだろうな」大和田も、私が見に行くとは思っていなかったような顔をして、従兵に酒を命じた。(50)

軍「慰安婦」の身の上を考えると、行く気にならなかったというのである。

元第八艦隊司令部付の主計士官だった藤本威宏は、軍「慰安婦」の立場に同情し、利用を拒否したという。以下はラバウルでのことである。

> 艦隊主計長は鹿児島出身の渡辺大佐であった。いかにも鹿児島人らしい磊落な性格で、酒を飲んではよく主計科の士官たちにご馳走したりするので、なかなか人気があった。しかし、艦隊主計長という任務は、こういう戦争になると、全く暇らしい。ある夜、「おい河西中尉〔藤本中尉のこと〕今晩みなと飲みにゆくから、お前もこい」というので、お供をすることになった。／山上の第八病院のすぐ下に、士官の慰安所があった。粗末な建物だが、いちおう料亭ということになっていた。そこが会場である。若手士官数名と、自動車で会場に向かった。／車座になって飲みはじめると、酌婦数名もやってきた。〔中略。夜が更けて主計長と当人を残して〕みなは、自動車で帰ってしまったという。あすの朝、われわれを迎えにくるということであった。〔中略〕／これまで私は、硬派で、まだ女性を知らなかったが、それを知っている仲間たちが、死ぬ前に一度経験させてやろうというので、主計長としめし合わせて仕組んだ芝居らしかった。しかし、私には毛頭そんな気がなかった。むしろ、ここの女たちに対して、なにか学生らしい同情を禁じ得なかっただけに、いささか憤然とした気持ちであった。／帰ろうとしても自動車がない。私は、酔った勢いにまかせて、真っ暗な山道を一散に駆け下った。(51)

軍「慰安婦」にされた女性たちに対して「学生らしい同情」を感じたからであるというのだ。

以上のようにすくなからぬ将校や兵士が軍慰安所の利用をやめるか、最初から拒否する態度をとっていた。

おわりに

軍慰安所を何の疑問もなく利用する多くの将校・兵士・軍属がいた。その動機や利用づけは、強姦を防止するために必要であるという者、殺伐とした戦場で潤いが生まれるという者、享楽・愉楽そのものを楽しむという者、などがいた。中には、死を目前にして生の未練を絶つ、精神の平静を保つ、死ぬ前に「女」を知りたいといった合理化をしている者もいた。しかし、軍が考えた軍慰安所必要論のひとつである性病罹患をふせぐためにという理由を挙げる者がいなかったことは注目される。軍慰安所で性病にかかる可能性が高かったという現実があったからであろう。

ところで、森利がのべているように、軍隊に入る前から買春にそまり、入隊後は軍慰安所通いを繰り返す将校・兵士・軍属や、軍隊で買春を覚えそれにはまる将校・兵士・軍属が多数を占める半面、軍慰安所通いを止める将校・兵士・軍属や、最初から利用を拒否する将校・兵士・軍属も少なくなかったことがわかる。

平井和子は、軍人が軍慰安所に行くか、行かないかを分けるのは「徴兵制・軍隊が必要とする「男らしさ」から降りることができる／できない、の違いではないだろうか」とのべている。[52] 男性性の問題を取り上げ、軍人が軍慰安所を拒否するには「男らしさ」からの脱却が必要だったというのだ。

これは当たっている面もあるが、以上でみた軍慰安所を利用しなかった将校・兵士や軍属はみな軍隊が必要とする「男らしさ」から降りていたといえるだろうか。軍慰安所に行かないのが「男らしさ」であると考える軍人もすくなからずいたのであり、現実は平井が考えるよりももっと多様だったというべきだろう。

実際に、性病感染を恐れて利用しないケース、軍慰安所が「不潔」だと感じて拒否するケース、性欲がむき出しになる軍慰安所での軍人のあさましさにあきれて止めるケースなどは無視できない。また、そもそも買春や軍慰安所利用に関心を示さないケースもある。さらに、日本主義的な情操上の理由から拒否するケース、純潔主義的な立場から妻や婚約者を思って拒否するケース、女性に対する凌辱である等人道上の理由で拒否するケースなど様々であったことが確認される。

本稿は科研費一八H〇〇七一六による研究成果の一部である。

注

(1) 日本の戦争責任資料センター（文責・吉見義明）「戦争体験記・部隊史にみる日本軍「慰安婦」⑤」『戦争責任研究』七一号、二〇一一年三月。同「戦争体験記・部隊史にみる日本軍「慰安婦」第二次②」『戦争責任研究』八〇号、二〇一三年六月。

(2) 平井和子「兵士と男性性」、上野千鶴子ほか編『戦争と性暴力の比較史へ向けて』岩波書店、二〇一八年。同「日本兵たちの「慰安所」」、吉田裕編『戦争と軍隊の政治社会史』大月書店、二〇二一年。

(3) 森利『モリトシの兵隊物語』青村出版社（東京都）、一九八八年、二二五頁。

(4) 以下、引用文中の／は改行があることを示している。〔〕は引用者による補注である。

(5) 利重静「戦場『わが転戦の記』」、五日の会編『続・美祢市民戦争体験記 五十年目の証言』私家版（美祢市）、一九九五年、一一五頁。

(6) 同上。

（7）佐藤宗次『海軍パイロットの証言 選修学生から中支・南方戦線へ』MBC21（東京都）、一九九五年、一八五―一八六頁。
（8）河村直哉『地中の廃墟から〈大阪砲兵工廠〉に見る日本人の20世紀』作品社（東京都）、一九九九年、一〇一頁。
（9）竹河信『憲兵はザンゲする』国際観光出版社（東京都）、一九五九年、一〇五―一〇七頁。
（10）上田政夫『戦中覚書』私家版（岸和田市）、一九九五年、巻末所収の新聞投稿文。
（11）原田政盛『支那人気質』文藝書房（東京都）、二〇〇六年、三―四頁。
（12）野口省己『回想ビルマ作戦 第三十三軍参謀 痛恨の手記』光人社、一九九五年、一七三頁。
（13）久生十蘭『久生十蘭「従軍日記」』講談社、二〇〇七年、五六―五七頁。
（14）同上、八〇頁。
（15）同上、八四―八五頁。
（16）同上、九三頁。
（17）今泉義夫「私の青春と潜水艦」、戦争体験記出版委員会編『回想 戦争と鎌倉人』同会（鎌倉市）、一九九六年、二一五頁。
（18）加藤清高『わが青春は戦場にあり』新風舎（東京都）、二〇〇四年、九五頁。
（19）鶴見俊輔『期待と回想』下巻、晶文社、一九九七年、二三四頁。
（20）渡部冨美男『千里の道』私家版（神戸市）、二〇〇八年、一九―二一頁。
（21）井上俊夫『初めて人を殺す』岩波書店（現代文庫）、二〇〇五年、九八―九九頁。
（22）同上、三一一―三一二頁。
（23）軍慰安所利用を拒否したと書いている記録の中には、実態とは異なるものもある可能性があるが、以下では、記述をそのまま提示する。
（24）武田貞太『戦場の衛生兵』文芸社、二〇〇一年、五四―五五頁。
（25）深谷芳太郎「「満州」からシベリアへ」、愛知県高等学校教職員組合退職者の会拡大編集委員会編『私たちの戦争体験』愛知県高等学校教職員組合退職者の会（名古屋市）、一九九五年、四九頁。
（26）太田義一『第二十二特別根拠地隊』私家版（富山県八尾町）、一九九九年、九八―九九頁。
（27）山本武『一兵士の従軍記録』安田書店（福井市）、一九八五年、一二五頁。
（28）同上、一二四頁。
（29）同上、一九四頁。
（30）今井新兵衛「ラシオの四季」、五経会編『航空戦の蔭に 第五飛行師団経理官の集い』同会（東京都）、一九六八年、二二〇―二二一頁。
（31）石川顕『日支事変 若き父の軍隊日記 昭和12年より昭和16年』私家版（新居浜市）、二〇〇七年、五八頁。
（32）同上、六八頁。
（33）同上、六九頁。
（34）同上、六九頁。
（35）同上、七一頁。
（36）同上、一二八―一二九頁。
（37）同上、一三一頁。
（38）同上、一三一―一三二頁。
（39）同上、二一八頁。
（40）同上、二三八頁。
（41）笹山良樹『チモール島戦記 総集編 及び［従軍慰安婦］について考

えてみよう』私家版（群馬県川場村）、二〇〇一年、一六八頁。

（42）佐々木賢二『我が輩は一銭五厘の兵隊さん』創栄出版（宮城県鹿島台町）、一九九四年、三二頁。

（43）天木清松『衛生兵の従軍日記 日中戦争（徐州戦・漢口戦）』私家版（岐阜県古川町）、一九九九年、七三頁。

（44）横田正平『私は玉砕しなかった グアムで投降した兵士の記録』中央公論新社（中公文庫、一九八八年草思社刊の『玉砕しなかった兵士の手記』の再版）、一九九九年、一八二―一八四頁。

（45）長尾喜又『地の塩 一通信兵の敗戦行記』リーベル出版（東京都）、一九九六年、一六一―一六二頁。

（46）小松真一『虜人日記』筑摩書房（ちくま学芸文庫、一九七五年筑摩書房刊の再版）、二〇〇四年、二六頁、二九頁。

（47）泉順作・泉祐順『父子二代 大陸転戦日誌』十月社（金沢市）、一九九九年、七七―七八頁。

（48）同上、一〇二―一〇三頁。

（49）佐々木博『ある蓑虫兵の詩』ウインかもがわ（京都市）、一九九七年、六七―六八頁。

（50）高戸顕隆『海軍主計大尉の太平洋戦争』光人社、一九九四年、七三―七四頁。

（51）藤本威宏『ブーゲンビル戦記 一海軍主計士官死闘の記録』光人社、二〇〇三年、二五―二六頁。

（52）前掲、平井和子「兵士と男性性」、上野千鶴子ほか編『戦争と性暴力の比較史へ向けて』一三六頁。

（中央大学名誉教授・日本近現代史）